# 胡適の旧白話小説について
## ——啓蒙小説「真如島」を中心に——

張　静

### はじめに

胡適という名前が中国の多くの人々に知られるようになったのは一九一七年、言文一致を提唱する「文学改良芻議」が『新青年』二巻五号に発表されてからである。その後、胡適はニーチェの主張を軸に「全ての価値を新たに判断する」ことを説いた「中国哲学史大綱」（一九一九年）を発表、さらに、「問題を研究し、学理を輸入し、文化財を整理し、文明を再び創造する」という四つの策略を述べた「新思潮の意義」（一九一九年）などの論文を発表した。さらに、「私の息子」、「社会不朽論」、「イプセン主義」など自由思想を提唱する論文によって、個人と社会との関係において個人主義も強調した。

胡適は新しい学問を身につけて、アメリカから帰国した新型の学者として梁啓超後の空白を埋めることになった。それゆえ、胡適は近現代思想史において新文化運動の啓蒙学者と自由主義思潮の代表人物と見なされている。この新文化運動における胡適の思想根源は「競業旬報」という雑誌に掲載された一連の論文からきたものであろう。胡適は「競業旬報」の第二十四期（一九〇八年八月）から主編を務め、第四十期（一九〇九年の春）まで続けた。この時に、発表された論文は女性の解放、迷信、家庭教育における母親の役割、愛国精神などで、その革命的な思想は、アメリカ留学後

二

の胡適の「社会不朽論」、「無後主義」、「イプセン主義」の雛形となる。言い換えれば、新文化運動を行う胡適の思想はまさに「競業旬報」時期の思想が深化し成熟した結果であると言える。それゆえ、胡適を論ずるには彼の思想が成熟する以前の草創期の習作についても視野に入れて置く必要があると考える。しかし、一九一〇年の留学以前の「競業旬報」で発表した作品はほとんど研究対象から見落とされてしまっている。そこで、本稿では、習作時代の旧作を含めてこの新文化運動の前後の胡適の思想の発展過程及びその意義などを検討したい。

## 一、「競業旬報」及び口語文の創作について

胡適は「文学改良芻議」で古く陳腐な文語文を生きた平易な日常の言葉で綴ることを提唱した。彼の文学の改良観は主に歴史の文学観に支えられ、進化論、個人主義などの観点から、文学の世界に影響を与えようとしたのである。新しい文学的価値観を作り出そうとした点ではまさに革命と言える。

清末まで白話体で発表された文章がなかったわけではないが、五四時期に入って初めて近代口語文運動として成功する。歴史的に文語文を口語文に替えるという言文一致の主張は時代の趨勢であるといってもよかろう。口語を表現言語とし、自由な文体を持つことが新しい文学のスタイルと特徴である。この特徴を持つからこそ古くて保守的な文学形式を破って新しい思想、精神などが自由に語ることができる。言い換えれば、日常的な口語表現の文学が生じることによって、文学が正確にものごとを語り始めることになった。作者の趣旨を分かりやすく伝える口語文の使用によって、人々の日常生活が生き生きと届けられるわけだ。このことによって、思想の宣伝が効果的にできるとしたら国民の思想を改造することも無理なことではなく、徐々に思想改造が進み、革命の黎明が近づくことになる。

一九〇四年（満十二歳）胡適は故郷と母親と別れ、上海の学校に入学する。梅渓学堂から澄衷学堂、中国公学[1]と次々に学校を替えた。胡適は最後の中国公学に在籍していた時に、『競業旬報』会長鐘文恢という人に誘われ「競業学会」に加入し、まもなく、その学会誌『競業旬報』への投稿を始めた。『競業旬報』の創刊宗旨は、①教育を振興する、②人々

の意見を集約する、③社会を改良する、④自治を主張する、ことにあった。そして、この学会誌は革命を目的とし、革命思想を若い人々に宣伝するため口語文を使用した。

胡適は執筆期間に『競業旬報』において五つの主張を提起した。それは①様々な悪習を取り除くこと、②様々な野蛮な思想を取り除くこと、③祖国を愛すること、④道徳を重んずること、⑤独立の精神を有することである。胡適は一生を通して儒教（名教）の批判、女子教育問題、纏足の問題など、女性の解放とイプセン主義など西洋の近代思想を中国に取り入れることに励んだ。それ故、この『競業旬報』の五つの主張を抜きに胡適の思想を語ることはできない。

一九〇六年十月二十八日に『競業旬報』の第一期が出版された。一九〇九年、春の終刊まで合わせて四十一期を出版した。第三期から第三十七期までの間に胡適は「真如島」という白話章回小説をこの雑誌に断続的に載せていた。「真如島」は胡適の唯一の長編白話小説である。習作時期に胡適が書いたこの「真如島」は主に「迷信を破って民智を啓く」を提示している。即ち、主人公は自らの思考力によって旧い伝統、悪習に疑いを懐く始め「個の精神」を持ち、科学的な方法で封建的な伝統からくる悪習と戦うということを示している。これはまさに胡適がニーチェの提唱した「全ての価値を新たに判断する」という近代的な観念を用い、旧社会に付き纏っている病根を見定めようとしていることにほかならない。

## 二、「真如島」について

### （一）小説の構成とあらすじ

署名は鉄児とある。「真如島」[2]は「迷信の打破」「因果の打破」「悪習」という三つのテーマに分けて分析できる。ところで、初載は、第一～六回は「競業旬報」の第三期～第十期（一九〇六年十一月～一九〇七年一月）に、第七～十一回は第二十四期～第三十七期（一九〇八年八月～一九〇九年春）に掲載されている。

第一回　虞善仁疑心により疾（しつ）に致る

四

孫紹武論を正し迷を祛う

虞善仁夫婦は半生菩薩を信じ他人を助けたりお寺に寄付したりするのを積極的に続けている。息子がなく娘一人だけで、目に入れても痛くないほどかわいがっている。床についている身である虞善仁は甥の孫紹武に話をしている。「この病気はもう治らない、今年はきっと死ぬ。四十九歳の時に、占い師にそう予言されたことがあるから。」新しい学問を勉強する孫紹武は叔父の病気のもとは疑心暗鬼にあり、疑心暗鬼が人を滅ぼすこともあると解説して悟らせた。

第二回　婚事を議すに盲人に問い道く
　　神籤を求め　土偶に決心さす

虞善仁は娘と孫との結婚を望んでいる。盲目の占い師に聞くと、二人は相性が悪いという。虞は占い師を疑い、やはり一番信用のある観音菩薩に聞きに行くことにした。残念ながら、観音菩薩でも大凶に当たった。当然、娘と孫との婚姻を諦めざるを得なかった。

作者曰く：疑心暗鬼の気持ちが残っている虞善仁は盲目の占い師と土偶の観音菩薩を頼るという迷信で愛娘の婚姻を壊してしまった。

第三回　愚頑を辟く　薄俗を閑に論す
　　時日を占い　高堂を幾諫る

裕福な舅の娘との婚事がまとまらなかったことで、周りの人々は残念がって孫紹武に嘆いた。孫は「財のため嫁を娶るのは恥だ」し、また、「おおよそ、早婚や血族結婚というものは最も害になる」と言い返した。

その時また、出発の日取りを選んでいる郭に会った。「本来、歴は天時の移り変わりを表しているものだが、今の欽天監や礼部がこの本来の意味を分からず、出かけに適するとか沐浴には適しないとか色々と書き示した。当然、無知な愚民たちは歴通り行事をするわけである。」孫は笑いながら郭にそう教えた。

年若く結婚の害や財産目当ての婚姻を決めることや日を選んで行事をすることなどの迷信、悪習を批判している。

第四回　甚輿を信じ　広く福地を求める
　　身世を憂い　遠く至親を探ねる

風水師の協力で長きに亘って見つからなかった理想の墓地をやっと決め、七年前に死んだ虞の両親、即ち孫紹武の外祖父母を土に葬ることになった。科学を提唱する孫は当然迷信を信じる舅に反感を持っている。孫は迷信に捕らわれている愚民を救うには教育を興すしかないとつくづく考えた。

孫は自分の将来を悩みながら親戚の叔母を頼って蕪湖に向かった。

第五回　逆旅にて諄々と蒲博を戒める
　　炎威烈々たる火煙の間

孫紹武が蕪湖に着く途中のある夜、隣室の二人の話し声が孫の耳に入った。老人は健康面、金銭面、時間面でもよくない点を挙げて、賭博で厖大な財産を失った婿を諭していた。その時、突然、外は火事が起きて大騒ぎになった。

第六回　殷殷な情誼　厚く至親を待
　　重々たる迷信　盛に善会を張る

孫紹武は姑の程家を訪ねると、程家が厚く彼を持て成した。孫も予定通り程家で新しい生活を始めた。毎日、二人の従兄弟とともに鄭先生について勉強する。鄭先生は南竹板を使ったり、八股文を教えたりする今までの先生とは違い、役に立つことしかを教えない。ある日、程家には、親戚の胡瑙がわざわざ善会を誘いに来た。そこで、胡は二人の子供と孫を連れて善会を行う下泉村に向かった。この下泉村は鬼神を信じることで有名な所であり、先王が神道により新たな宗教を設けるために会賽神を作り上げた所である。

第七回　溌婦群魔を掃い　力て菩薩を誅す

五

善会を施す痴人妄に仙薬を想う

突然、騒ぎが起きていて外に出てみると、猛々しい婦人が大声で罵りながら歩いてきた。彼女は会場に入ると一つずつ菩薩の頭を斬り始めた。すると、床に三、四十個の菩薩の頭が散らばった。それから、何十個かの頭を拾って外の便所の中に投げいれた。

そのわけを聞いてみると、この婦人の夫と夫の兄弟が疫病で倒れて婦人は菩薩の前で「家族の病気を治してくれれば、今回の善会の費用は全部我が家が負担する」という大願をかけた。しかし、皮肉なことに夫はすぐ死んでしまった。相次いでその兄弟もなくなった。婦人はそのことに衝撃を受け「菩薩の霊験はどこにあるのか、心を込めてたくさんお金を使ったのに」と泣き叫んだ。「神通力、菩薩を信じ込んではいけない」という結論を得た。それで、婦人は何も助けてくれなかった菩薩を殺しにきた。

第八回　天火炎々として　奸人の魄を褫う
　　高談侃侃として　志士の愚を箴める

胡瑙の親戚の金氏夫婦は雇っている人に酷薄、吝嗇な扱いをすることで有名である。ある日から火事が何回も引き結き起った。その後、保険に加入すると無事だったが、けちな金氏は保険金を惜しがり保険を止めた。劇的にも保険を止めるとすぐ大きな火事が起きた。今回は店も財産も息子もすべてなくなるという大惨事に終わった。

作者は次のように解説する。

これは因果応報じゃないかと胡が孫に訊ね、悪いことをしたら当然悪い結果になるはずだ。と言うと、孫は菩薩や神様が作用しているわけはないと答えた。

第九回　一席の話　名賢を紹介す
　　幾首かの詞　往哲を迢に懐かしむ

胡瑫は孫の考えを聞いて同感し、更に、近溪先生のことを紹介した。彼は孫と同じく神仏などには反感を抱き、学問や教養の必要性を提唱する人である。意気投合したので初対面でも楽しく話し合った。ある日、詞人の石鶴舫先生の詞が見つかると、世俗には理解してもらえない品位が備えているこの先生の詞に二人で感嘆した。

第十回　名教の罪人　美卿に友を負むかせ
　　倫常の針砭（しんべん）　近溪に言を放（はな）たせる

蘭仙の娘は幼い頃から「童養媳婦」として親友の美卿の息子の嫁になっていた。母がなくなると娘が美卿邸に住んだ。嫁というより実際は美卿の妻に虐待されている家政婦であった。結局、蘭仙は娘を美卿家から取り戻し、親の所に戻ってきた娘はこれからは幸せな暮らしを始めるはずだった。しかし、蘭仙には既に新しい妻を娶っており、娘には継母であった。中国の倫理上では継母も一つ大きな問題である。自分の子を持っているかどうかにかかわらず前妻の子を自分の子のように扱う継母はほとんどいない。どうしても「異心」があるから。もちろん、子供も継母を受け入れることがなかなか出来ないのである。

第十一回　模棱（あいまい）な語世を惑わし　民を誣（し）いる
　　薬石（やくせき）の言時を傷（そこ）ね　俗を疾（くる）める

程儀が鄭先生に「世の中に鬼神は本当にいるか」と聞いた。なぜなら、彼は昨日、ある不思議なことを見聞した。それは、ある人が神仙というものが存在しているかを試すため、娘のものを隠し「紛失したものがどこにあるか」と神仙に占いを願い出た。ところが、神仙は「自らの心に聞いたら分かる」と答えたのでその人は驚いた。更に、「天を欺く」と砂の上に続けて書き示された。その人はこれを見て魂が体から出るほど呆然としたということを聞いたからである。

鄭先生はこれを聞いて「我々中国人は自分でものを考える資質は持っていない。いつも言われたまま受け止めてしまう。」と嘆いた。

### （二）各回のタイトルと結びについて

この旧白話小説に使われたタイトルは伝統的な章回小説の固有の形式を採っている。読者は題名を見ただけで作者のその回の趣旨を推測することができる。また、文末に「要知……且听下回分解」（訳文：……続きは次回にお話しましょう）という章回小説の結びの形もそのまま採用されている。

文学革命運動期に白話文を提唱した胡適は、「真如島」を習作として白話の形式で小説を書き上げたわけである。前述したように「生きた」文体で表現することで広く民衆に伝えることの有意義さを意識した胡適にとって旧小説の形式を襲用することで、表現方法としたことは、この段階における精一杯の試みであったと考えられる。

主人公の孫紹武という青年は各回にすべて登場するが、主人公以外の登場人物は親戚や友人など様々である。主人公がすべての回に登場することによって、この小説はその当時の民間の風俗習慣を絵巻物のように一連の物語として描写する。そこで、旧白話の章回小説形式に描かれるこの作品の特徴を見ていく。

### （三）テーマ及びその表現、修辞法

「真如島」は反語と挙例を中心に、ほかに方言、心理描写、対比、擬声語、外見描写、比喩、感嘆、俗語、羅列という十一種類の表現方法が使われている。一番多く使われているのは頻度数十二回の反語である。反語が頻繁に使用されているのは、根深い迷信思想を破るためにまず迷信の害を認識させる必要からであろう。その害を直接説明するよりは考え直し悟らせるという反語形式が有効なのであろう。二番目は挙例が十回を数える「例を挙げる」ことで道理を説くことは、迷信に固執する考え方を直させ、迷信から脱出する具体的な例示を与えることになる。

主にこの二つの表現手法を通じて、愚民が迷信から目覚める「治療」プロセスを描いている。また、作者は他の九種類の表現手法を加え、教訓話として生き生きと教え諭すことで、人々に道理をわかりやすく悟し、快く受け入れること

ができるように工夫する。

小説全十一回の各テーマは迷信の打破、因果応報、悪習三種類にまとめられる。テーマごとに各回の表現方法を検討していきたい。

## ●迷信の打破

迷信批判は主に「疑念」、「婚姻」、「風水」、「選日」、「菩薩」、「科学」、「思考力」七つの観点から論じられている。

虞善仁は占い師の言葉を信じ込んでいて疑念で頭にいっぱいになっている。「この病気はもう治らない、今年はきっと死ぬ。四十九歳の時、占い師にそう予言されたことがあるから」という「疑念」から生じた不安を孫紹武にこう訴える（第一回）。虞善仁は盲目の占い師と土偶の観音菩薩を頼る愛娘の「婚姻」を占う（第二回）。「風水」師の協力で長きに亘って見つからなかった理想な墓地を決め、七年前に死んだ虞善仁の両親、即ち孫の外祖父母を土に葬ることがやっとできた（第四回）。叔父の虞善仁がこの三回に登場する。著者が年配の虞善仁を登場させるということはこの三つ迷信思想がもっとも根本的、深刻であるからであろう。

また、友人の郭は暦により今日は凶日なので改めて出発日を選んだという「選日」（第三回）と「菩薩の霊験はどこにあるのか、心を込めてたくさんお金を使ってもなんでかえて惨劇になるの」、「神通力のある菩薩を信じ込んではいけない」と泣き叫んでいる婦人の後悔の姿を描いている「菩薩」（第七回）。この二つの回に登場した三人はちょうど老若男女に当たり、迷信の普遍性を提示している。

さらに、神仏などにもっとも反感を抱き、「科学」を提唱する孫の同志の近溪先生を描く（第九回）と「我々中国人たちが自分でものを考える資質は持っていない。いつも言われたまま受け止めてしまう。」と鄭先生が嘆いた（第十一回）。この二つの話が迷信に反対する少数派を対比的に描いたものである。このように、迷信への普遍性・固執性と反迷信の稀少性という二重の対比構造で迷信に対する痼疾（持病）性を強調している。

以上七つの観点から「真如島」における中国民衆と迷信の関係を提示した。次に、これらの問題を如何に描写しているかを、使われているその表現法と修辞法から検討を加える。

① 外見描写

（ア）「这人身材短小，容貌不扬，面上略略有几点黑麻，身上穿了一件龌龊不堪的长衫」（訳文：この人は背が低く小さい。顔にはいくらか黒いあばたがある。そして、あまりにも汚らしい服を着ている）。

（イ）「年纪约在四十左右，满面愁容，然而那人虽是愁苦，那愁苦之中却狠带着一种慈祥之气，显然是一个正人君子。」（訳文：年は四十くらい、顔中に憂愁の色を浮かべているが、憂愁と苦悩の中にも慈愛をたたえる明らかな正人君子である。）

外見描写を通してその人物の姿が生き生きと描写されているだけではなく、作者が与えようとする登場人物の性格もその描写から読み取れる。

② 心理描写

（ア）「虞善仁听了这番话，心中却似信不信的疑惑不定」（訳文：虞善仁がこの占い師の不吉な話を聴いても、半信半疑でなかなか疑い切れなかった。）

（イ）「绍武常说算命的不可相信，现在看起来，恐怕算命的真个靠不住呵！我们不要受它的骗呵！咳！现今且不要去管它，我且去问问菩萨看。」（訳文：绍武はいつも占い師を信じるなと言っている。今にして思えば、およそ、この占い師は本当に信用できなかったのだろう。騙されたらだめだ。ああ、今は構ってられない、とりあえず、菩薩を聞きに行ってみよう）

迷信中毒の虞善仁の躊躇する心理を描写している。この躊躇しながらも信じるという心理が民間の迷信信仰の根深さを提示している。

③ 対比表現

虞善仁は一生菩薩を信仰し、他人を助けたり、お寺に寄付したりする仏教の信仰者である。一方、新しい学問を勉強する甥の孫紹武は、叔父の病気のもとは疑心暗鬼にあると思い、疑心暗鬼により人を滅ぼすこともできると説いた。このことは、二人の老人と若者、迷信と反迷信という鮮やかな対比により、迷信信仰の深刻さを認識することになる。

④ 反語表現

（ア）「菩萨难道真个没有灵威么？不然，何以我家许了这么大愿，非但不能免灾救命，反而死的快了」（訳文：まさか菩薩が本当に霊験がないものなのだろうか？さもなければ、我が家が何故こんな大きな願をかけることなどあったろうか、助けてくれないばかりか、すぐにも死んでしまうとは）

（イ）「况乎孔夫子是个大圣人，他尚且说『君子畏天命』的话，难道令甥的本事，竟比孔夫子还大吗？」（訳文：いましてや孔子先生は大聖人なのですよ。あの方ですら「君子天命を畏る」とおっしゃったとするなら、まさかあなたの才能は孔子先生より大きいとでも言うのですか？）

反語表現により相手を否定することにより、民間に浸透していた社会通念の根深さを強調している。

⑤ 感嘆表現

「天阿！千不该，万不该，倚靠什么神道的力，信任神道以为菩萨力大，必能救人生命，懵懵懂懂的把一家人的生命送在这泥塑木雕的身上〔省略〕千头万绪毕竟是「菩萨」二字，害得我好苦呵！害得我好苦呵！」（訳文：天よ！いけません。いけません神通力というものを当てにし、神通力を信じ菩薩の力は偉大であり、必ずや人命を救ってくれると思ったのです。何も分からずに一家の生命を泥と木で作った人形として葬ったのです。〔省略〕何から何までですべてが「菩薩」のいう二文字に明け暮れたせいで、私は苦しんでいるのです。そのせいで、私は苦しんでいるのです。）

感嘆という形で後悔を描写している。菩薩を信じだからこそ災難に遭ったと感嘆しているのです。作者は様々な表現手法により菩薩など神通力に頼った結果が、後悔してもはじまらない悲劇になった例を描いている。

以上、「真如島」における迷信の問題を外見描写、心理描写、対比表現、反語表現、感嘆表現を通して概観してきた。

そこで作者は上下五千年の悠久な歴史を持つ中国における迷信信仰の現状を提示していた。

## ● 悪習

悪習についても作者は中国の読者にとっては馴染深い「賭博」、「名教」を取り上げ論じている。老人が一々例を挙げながら、賭博は一番害するものであると教訓話を婿に教える「賭博」の例（第五回）。自分の小娘が幼い頃から聯姻で親友の美卿の童養媳[3]になるが、嫁というより実は美卿の妻に虐待される手伝いであった。最後、蘭仙は娘を美卿家から取り戻すが、継母の問題が出てきたという「名教」の話（第十回）。注意を要するのは、このような害習が根深いということである。「賭博」は投機的に堕落させる道楽であり、特に教養レベルの低い、無職の人が大多数を占める。「童養媳」問題も「継母」問題も中国に根強く残っていた痼疾（持病）である。次に作者が用いた表現法、修辞法を分析しながらこの二つの悪習について見てみよう。

① 挙例法

「如你家蒲家表叔和舒家姐夫，他们的家私何尝不是二、三万金么？都只为赌博输了个光身子」（訳文：例えばおまえの所の蒲叔父と舒伯父の財産はこれまで二、三万両もあったではないか。結局は負けてすっからかんだ）

老人はこの時、健康、財産、時間という三点から賭博の害を婿に教え導く。この悪風を止めないと社会に危害を及ぼすのだと強調している。具体的な実例を幾つか挙げることによって道理をわかりやすく理解、納得してもらうのである。

② 羅列、反語の表現

「一来呢，官即判令美卿打还你的聘礼，你难道肯受吗？二来呢，即使府里判美卿家娶你的令爱，难道你令爱好做他二房吗？（省略）难道……」（訳文：一、美卿に結納を戻させるとしても、まさかあなたは受け入れるわけではあるまい。二、もし役所が美卿にお嬢さんを娶らせると申立ても、まさかお嬢さんが妾になるわけではあるまい。（省略）まさか……）

反語表現の「まさか」（難道）を羅列することで中国の名教思想の弊害を指摘し強く批判している。このような強調表現を採ることによって聴く人に納得させている。

「童養媳婦」も「継母」も中国の伝統の倫理上の痼疾や弊害として扱われている。ごく一般に発生する家庭問題として無数の女性、子供がその苦難を嘗めている。そればかりではなくて、中国が抱える社会問題として等閑視してはならないという啓示も含まれている。

## ●因果応報

茶店を経営する金氏夫婦は酷薄、吝嗇な扱いをすることで有名である。保険料を惜しがり保険を止めた。劇的なことは保険を止めるとすぐ再び大きな火事が起きた。今回は店も財産も息子もすべてなくなったという大惨事に終わった。因果と言わずに何んというのか因果応報を描く話（第八回）。以下に、その回に使われる修辞法を見ながら因果応報について検討してみよう。

① 挙例法

「这因果两个字，可以把一树鲜花做一个比喻，譬如窗外这一树花儿，枝枝朵朵都是一样何曾有什么好歹善恶的分别，不多一会起了一阵狂风，把一树花吹一个花落花飞飞满天，那许多花朵有的吹上帘栊，落在锦茵之上，有的吹出墙外落在粪溷之中，这落花的好歹不同，难道好说这是这几枝花的善恶报应不成。」（訳文：因果という二字を木の花に譬えるとすれば、窓の外に咲いている花のそれぞれにどうして好悪や善悪の違いを見つけることがあろうか。間もなく突然強風が吹き起こって花びらが空中に舞いながら窓の近くの美しい庭に落ちるものもあれば、壁の外の便所の中に落ちるものもある。この落花の好悪の違いはまさか因果応報とでもいうのでしょうか？）

このような例を挙げながら因果応報の誤謬を指摘する。

② 反語表現

「什么上帝哪！菩萨哪！既能罚恶人于既作恶之后，为什么不能禁之于未作孽之前呢？」（訳文：何が神だ、何が菩薩だ！犯罪の後で賞罰するなら、なぜ犯罪を起こす前に禁止しないんだ？）

落花の例は范縝の「因果論」[4]から引用したものである。落花はただ偶然に発生する自然現象である。原因がない結果はない、結果が生じない原因も存在しない。即ち、因、果は必ず同時に存在する。因果律がわかる人なら事実にそって考え、その結果の原因を探し出す。物事の発展する客観性に随って真実を捉える。民衆は決められた勧善懲悪の応報思想に囚われ、因果律を科学的に考えようという意識さえ持ってない。因果応報は現在のことが未来の果になる。現在の果は前世の因からきたものという仏教思想である。もともとは人に善事を進めるという勧善懲悪の観念から生じたものである。しかし、実際は民衆の受け入れ方によりついにすべてが応報になるという迷信として定着した。小説において孫が「天は人が悪事をするのを止めることもできない、悪人を懲罰することもできない」と確信する。いわゆる人に応報を与える神は存在していない。これは作者の胡適が幼年時代に司馬光の「形既朽灭，神亦飘散」（形が朽ちてなくなったら、精神も消えていく）から受けた「無神論」[5]の影響があると考えられる。

## （四）「真如島」の主人公とそのテーマ

### ◆ 主人公

小説の主人公は孫紹武という人物は新しい知識を持ち、迷信を排斥する青年である。作者は自らの創作動機を孫を代弁者として語らせるのだ。だから、孫はほとんど主人公として最初から最後まで登場している。彼はいろんな場所で見た迷信現象をそれぞれ批判し道理を説き明かして人々を覚醒させる。言い換えれば、孫紹武は新しい学識で自分を武装した新しいタイプの知識人である。作者はなぜ迷信を排斥する新式の知識人という役を主に孫一人に集中し、なぜ他の登場人物に分担させないのであろうか。おそらく、孫が迷信に強く反対したり、人々に積極的に道理を解説しているこ

とから、判断して以下の二点を強調したいのではないかと考える。

① 古い社会における孫のような新しいタイプの知識人の出現を印象づけること。

② 孫は作者であり作者胡適は孫であること。

当時、中国公学の学生である作者は主人公に自分の姿を投影させたと考えられる。特に幼年時代に受けた無神論の影響を色濃く反映する姿を主人公孫に演じさせているように思う。

### ◆テーマ

「真如島」は、主に「疑念」、「婚姻」、「選日」、「風水」、「菩薩」を中心に封建社会が残留した迷信思想を批判した。また、「賭博」、「童養媳婦」など深刻な社会悪習も、根強い「因果応報」の問題も描き出している。さらに、科学知識、思考力が欠ける庸俗な世間の人々の精神面までにメスを入れた。彼らは科学知識が欠けるということで容易に迷信思想に惑わされる。一方、悪習に染まった人々は科学知識とは直接に結びつかないが、その根本的な原因を抉り出すには科学知識が必要であり、それを身につけることによって悪習に抵抗できるという論理である。

作者は以上の問題を一つずつ各回に散りばめそれぞれに特有な登場人物を設けて各問題の性質を説き明かす。そして、各問題は作者が「競業旬報」に提出した五つの主旨と一致する。特にその中の悪習慣、野蛮な思想を取り除くことと独立精神を有することは「真如島」において詳しく論じられている。まとめて言えば、創作の主要な目的は科学知識の教育必要性を主張することである。科学知識を持つ人しか独立して考え始めることができない。いわば、目の前の現実の中国を自ら確認するため、疑念を持つことから始める訳である。これは胡適思想の根本であろう。だから、最終回において「思考力が欠ける」を指摘したのもこの意味である。まさに、このことが初期の懐疑思想から発展し、自由主義、個人主義、忍耐哲学などの主張へと展開する胡適の政治、文化の認識論にとって不可欠の要素と言える。

## おわりに

### 「真如島」と胡適初期思想とのつながり

「真如島」の主旨である「迷信を破る」は無神論者の胡適の最も根本的な社会改良宣言である。無神論は主に司馬光の『資治通鑒』の「形既朽灰，神亦飄散」（形が朽ちてなくなったら、精神も消えていく）と範縝の「因果論が存在していない」という観点に影響されたものである。胡適が『四十自述』において無神論者についてこう語っている。「私は十一、二歳の時すでに無神論者になった」、「司馬光の言葉により私は地獄を信じないようになった。範縝は私をさらに一歩前進させ無神論者の道を進ませた」。[6]

そして、胡適は幼年からすでに程朱の理学の「疑い」「考え」の影響を受け、中国の伝統的な鬼神迷信に疑い寄せていた。十七歳の彼は上海で思想を宣伝する機会をもらうと一年間余りに作品を発表し続けていた。且つ、一九一〇年から一九一七年までアメリカでの留学時期にハックスリの疑い精神、デューイの実験方法を身に付け、幼時の懐疑思想を固めて完全に無神論者に変身した。「私のその後の思想はハックスリとデューイの思想の道を歩ませた。それはまさに十数歳から非常に思想の方法を重んずったからである。」[7]と『四十自述』のなかで述べている。

帰国後、文学革命の新文化運動を行う同時に自由主義も個人主義も主張した。社会に貢献しようとするなら、まず社会に役立つ自分を培うことからスタートのである。したがって、封建の束縛から脱出して自由、独立を得て十分に個性を解放することは何よりも重要である。このことは「真如島」の中で名教を信じ、独立思考の能力が欠けるという民衆の痼疾を指摘したことと一致するではないだろうか。

### 注

1 中国公学　一九〇五年日本文部省が中国留学生規則を取り締まるのを公布した。中国留学生たちが侮辱を受け、憤慨に帰国して翌年の春に上海で創立した中国の最初の私立大学である。且つ、この学校は革命の大機関でもある。

2 『胡適全集』第十巻　季羨林主編　安徽教育出版社　二〇〇〇年九月

3 童養媳婦　将来息子の嫁になるから子供の時から家に引き取られた女の子を指す。
4 『四十自述』　胡適著　亜東図書館出版　一九四〇、二月　P72-78
5 注4に同じ
6 注4に同じ
7 『四十自述』　胡適著　亜東図書館出版　一九四〇、二月　P132

＊「真如」は仏教術語、「真実如常」（梵文 Bhutthatha ta）の省略語である。真は直の体虚妄でないこと。如は如常である。